

## ブラジル国家の指導者たち

—モラロジ—の「伝統」の原理からの一考察—

宮崎 珠 徳

### 目 次

- 一、はじめに
- 二、ブラジル発見時代の指導者たち
- 三、ブラジル王室時代とその指導者たち
- 四、共和国時代とその指導者たち
- 五、モラロジ—という「伝統」の原理からの一考察
- 六、むすび—モラロジ—の国際化との関連において—

### 一、はじめに

本稿は、ブラジル史に基づき、モラロジ—という「伝統」の原理、特に「国家伝統」の視点から、ブラジル国家の指導者たちについて考察しようと試みるものである。

ブラジル社会において、モラロジ—はいっそう確実に普及しつつある。このような中で、ここに執筆した内容が、伝統報恩・人心開発救済のためにわずかでも役立つならば、まことに幸いである。

## 二、ブラジル発見時代の指導者たち

### (一) ブラジル発見と国家形成—その梗概

ブラジルは一五〇〇年四月二日に、ポルトガル人のペードロ・アルヴァレス・カブラールを船長とした一行によって発見された。当時カブラールは、武装船十隻、食糧を積んだ船三隻、一二〇人の兵と船員からなる船団の長として、「香料と宝石の国インド」さらには「秘境黄金の国ジパング」へと向かって旅立ったのだが、結果は新天地を発見するという別の方向へと進展した。

「新天地ブラジル」の発見は、当時の貿易資源の確保・拡大をはかったヨーロッパの財閥家に大いに刺激された点が多かった。そしてまた、十五世紀のルネッサンスの学者たちによる天文学・地理学などの発展の影響、つまり、羅針盤の発明、三本マスト大帆船建造など、当時の技術革命による新しい航海術・造船技術等が大きく貢献して「新天地」発見につながったのであった。

「新天地」発見時の模様は、書記役として乗船していたペロ・ヴァス・デ・カミーニャがポルトガル国王ドン・マヌエル宛に報告した書簡に克明に記されている。ポルトガル人たちは、これまでに多くの海洋を渡り、数多くの島を発見してきた。この陸地の発見についても、とくに感慨をもたなかった。

ブラジルに上陸した船団員の多くは、インディオ（原住民）に、金や銀、宝石などの所在をたずねたが、みあたらないことを知ってがっかりした。カブラール一行が接したインディオは、今でも存続するトゥビー族とグララニー族で、当時、約三〇〇万人から五五〇万人が住んでいたといわれる。

ポルトガル国王ドン・マヌエルは、一五〇一年と一五〇三年にブラジルへ調査団を派遣した。その団長アメリ

コ・ヴェスプッチの名前は、のちにアメリカ大陸、アメリカ合衆国の名となった。ヴェスプッチは五か月間ブラジルに滞在したのち、調査の結果報告をした。

その内容によれば、ブラジルには赤色染料用の独特の木「パウ・ブラジル」をのぞいては、金も銀もなく、また商品価値をもつ胡椒<sup>こしょう</sup>その他の香料も見当たらず、そのうえインディオは野蛮な食人種であると印象的に報告され、奴隷にも使えそうにない<sup>(一)</sup>ということであった。国王は、発見した広大な土地が期待はずれとなったため、あまり関心を示さなくなった。だが王は、当時一八〇〇キロにおよぶブラジル海岸地帯のパウ・ブラジルの伐採を許可してブラジル領土維持を奨励した。この奨励は、その後数十年間も続いたフランス、イギリスそしてオランダの海賊船による略奪を防ぐために大いに役立った。

### (二) ブラジル国名の由来

発見された当初のブラジルは、イーリヤ・ダ・ヴェーラ・クルース（真の十字架の島）と命名されたのであるが、大陸とわかったのち、まもなくテーラ・ダ・サンタ・クルース（聖なる十字架の地）と改名された。その後、植民地としてプロヴィンシア・デ・サンタ・クルース（聖なる十字架の県）と改められた。ブラジルはこのように、ポルトガルのキリスト教的な伝統に根ざした名で呼ばれていたが、パウ・ブラジルを伐採しはじめてからは、テーラ・ド・パウ・ブラジル（ブラジルの木の地）、さらにはテーラ・ド・ブラジル（ブラジルの地）という俗称が広く使われ、のちには単にブラジルと呼ばれるようになり、そしてそれがそのまま国名として定着した。このような国名の移りかたに、真摯なキリスト信者の中には、悪魔がブラジルの国名を汚している、と嘆くものもいたという。

ブラジル領土の変遷——1493年から現在まで

図1 1493年の  
教皇勅書による領土



図2 1494年の  
トルデジーリャス協定



図3 1580年～1640年  
スペイン領土と併合



図4 18世紀後半の領土

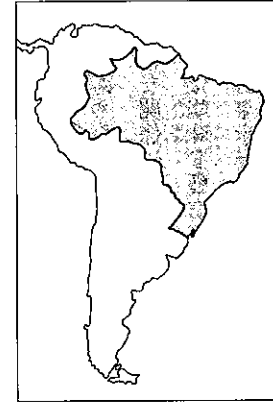


図5 19世紀後半の領土



1825年ブラジルから独立  
ウルグアイ共和国樹立

図6 現在の領土



三、 ブラジル王室時代とその指導者たち  
(一) ドン・ジョン六世の時代

ブラジルは発見されて以来、約三世紀にわたってポルトガル本国から遠い植民地に過ぎなかった。その間のブラジルの歴史の要点をかいつまんで述べよう。

十六世紀初期は、ブラジルの木の最盛期ではあったが、植民地化・開拓化困難の時代でもあった。そのため、同世紀後半はブラジル開拓の資力ある貴族または功労者（十二家族）に領土を与えて「カピタニア」という世襲領土統治制を設け、その後、「世襲制総督政治」を導入して植民地維持をはかった。だが、結果は両方とも失敗に終わった。農業では砂糖や綿花が大量に生産されはじめ、手不足のためインディオと黒人の奴隷の捕獲と輸送が始まった時代である。

また一五八〇年から一六四〇年までポルトガルとスペインとが併合していた時代があった。その間に遊牧・放牧式で西へ西へと開拓していった。そしてブラジル領土とスペイン植民地領土が併合以前のように分離した一六四〇年には、一四九四年のトルデジーリャス条約時の面積より一挙に三倍近くも広い領土を持つことになった。（図1～図6参照。）

十七世紀は砂糖最盛期で、長期間にわたるオランダ商人の活躍ならびにオランダ人による北東地方への侵略があった。また奴隷の逃亡、反乱（黒人だけの独立国家の運動）なども起こった。世紀末になって、ミナス・ジェライスで金鉱が発見された。

十八世紀初期には金の最盛時代となる。本国の税制に反対してブラジル共和国樹立を企てる独立運動が始まり、

その活動家の一人、チラデンテス（彼は共和国になってからブラジル建國の父となった）を戒めとして処刑し、他の者をアフリカへ島流しにした。世紀末には「金時代」も下火になり、再び農業時代に入った。当時、イギリスでは産業技術の機械化が開発され、毛織物から再び綿織物へと代わり、その産業の王座につくようになった。そのため、綿花の需要が激増し、イギリスやインドの産物だけでは不足し、ブラジルの綿花の生産に刺激を与えた。金発掘から綿花生産へと代わったのである。だが、ブラジルでは旧式のままで生産し続け、品種や生産技術の改善策を講じなかったため、世界市場では置き去りの状態になった。こうして綿栽培地はしだいに牧場と化していった。そして当時の世界の動きに注目した「リオ・デ・ジャネイロの商人は、新しい輸出品としてのコーヒーに注目しはじめた。そして彼らによってコーヒー栽培が促され、政府も強制的に農民にこれを植えさせたのである。そして十八世紀の終わり頃からアメリカへ輸出されるようになり、十九世紀に入ると貿易商品としての重要性が明らかになってきたのである。いわゆる「金時代」から「コーヒー時代」への転換の時代である。

十九世紀になってから、大きな出来事が起こった。それは、一八〇七年に、ブラジルが経済的に転換期にあつたとき、本国ポルトガルはナポレオンの支配下のフランス軍攻撃の危機に直面した。ポルトガル王室と政府はその攻撃のわずか一日前に、ブラジルへ避難し、リオ・デ・ジャネイロにポルトガル政府を移転したのであつた。

このような事態の始まりは、ヨーロッパを征服したナポレオンが、イギリスの工業製品をヨーロッパ大陸から閉め出すための「大陸封鎖令」を發布したことによる。それは、一八〇六年であつた。ところが、ポルトガルは一世紀前の一七〇三年に結んだミシユエン条約によって、英国とは貿易上密接な関係にあつたし、またイギリスを敵にすればブラジルを奪い取られる危険もあつたから、大陸封鎖令に対しては曖昧な態度をとらざるをえなかつた。このようなポルトガルの利害と曖昧さに憤慨したナポレオンは、一八〇七年十一月、ジュノー将軍が指揮

する三万からなる軍隊をポルトガルへ侵入させた。ドン・ジョン六世は、その貴族・高官・將軍たちとそれらの家族一万五千人を率いて、フランス軍が攻撃する前日にあわただしく十六隻の船に乗りこんで、イギリス艦隊の護衛のもとに、翌年の三月七日、リオ・デ・ジャネイロに到着したのであつた。

ブラジルにとっては予期しない出来事であつたが、幸運にも繁栄をもたらす大きな原因となつた。

王族一行は、リオに着いて間もなく、三〇〇年間も閉鎖していたブラジルの港を開放した。またグイヤモンドとパウ・ブラジルを王室独占品とした以外は、それまで禁止していたすべての産業を自由化した。

一八〇八年、ドン・ジョン六世は、公共事業が無に等しい状態にあつたブラジルに図書館や郵便局を設けるほか、新聞・雑誌などの発行を許可し、同年十一月には広大な国土を開発するため、移民の入国や外国人による土地所有を許可した。またそれだけでなく、国立銀行、裁判所、専門学校、大学、博物館、劇場、動物植物研究所等々を建設し、ブラジルの活性化に努めた。その結果、外国人の往来は年々増え続け、王室の目指した近代國家の建設が現実となった。ブラジルはこうして初めて発展を目的の当りにすることができたのである。

ブラジルは、王室移転によって独立國家同様となつたが、実態はポルトガル政府を移してブラジルを支配しているに過ぎなかつた。生粋のポルトガル人がほとんど支配していた。長年住む（ポルトガル人を先祖とする）ブラジル人たちは、この新政府の中心的存在になる機会はなく、政治機關の重要ポストは王室とともに移つてきた貴族・將軍その他の高級官僚たちで占められていたため、ブラジル人とポルトガル本國人との伝統的なあつれきをいっそう深めていった。

そのため、政治問題とも絡んだ革命的な反乱が絶えず起こつた。たとえば、ブラジル人が王室・政府を脅かすような出来事を起こしたのは、一八一七年のペルナンブーコ革命で、ブラジル北東地方の諸カピタニア（世襲領

土統治制)を統合して新しい共和国を樹立しようとして企てたものがそれであった。この革命は、ポルトガル系の将軍へのブラジル人将校の軍隊内での憎悪、ポルトガル商人に対する地元商人の反感、カピタニア長官の悪政に対する住民の不満などが、当時、南アメリカの各植民地で続発する独立革命の刺激を受けて表面化したのである。革命は軍隊の主導によるものであったが、新共和国の樹立は美らなかつた。革命政府は三か月程のちに倒され、首謀者十五名は死刑に処せられた。

## (二) ドン・ペードロ一世の時代

イギリス軍は、一八一五年に、ポルトガルに侵入したフランス軍の追放に成功した。そのイギリス軍は、同年十一月に行われたナポレオン戦争パリ和約締結後も、そのまま国王不在のポルトガルを専制的に統治し続け、引き揚げようとはしなかつた。ポルトガル市民はこまった。また、王がポルトガルを放棄してブラジルに本国を建設しようとする意図もみられたため、ポルトガル市民はとまどいを感じた。こうした状況の中で、ポルトガル市民は、一八二〇年、イギリス駐留軍のベレスフォード司令官が海外旅行中に革命を起こし、支配権を回復した。新政府は、ただちに憲法制定議會を開くため、国王ドン・ジョン六世にブラジルからの帰国を要請した。国王はこの出来事を重視して、一八二一年四月末、皇太子ドン・ペードロを摂政としてブラジルに残したのちポルトガルへと向かった。

その後のポルトガル議會は、ブラジルに集中し始めた政治的影響力を弱体化するために、ブラジル各州の管理・運営を本国直轄化、リオ・デ・ジャネイロの裁判所廃止、摂政政治の廃止とドン・ペードロ皇太子への帰国要請などを議決した。

ところが、ブラジルの気候や風土に魅せられて新天地を本国にするよう計画していたほどの皇太子は、ポルトガルへの帰国を拒否した。この皇太子の拒否によって、ブラジルはポルトガルに直屬しない新王国樹立の可能性がいつそう濃くなった。ブラジル人の多くは皇太子の帰国拒否宣言をおおいに歓迎した。しかしその反面、ポルトガルからの完全独立を志すグループ、つまり、皇帝の反逆者として処刑されたチラテンテスを中心とした共和政治理念の思想家たちは、好ましいものとは思わなかつた。

ブラジル住民の世論は独立運動へと急速に傾いていった。皇太子は、王室とブラジル議會の調和を目的としてまずミナス・ジェライスを訪れ、さらにサンパウロへ赴いた。彼はサントスからの帰途、サンパウロ市郊外のイピランガ丘で、リオ・デ・ジャネイロから早馬で駆けつけた使者から重大な二通の手紙を受け取った。一つは、ポルトガル政府からの手紙で、ブラジル議會とドン・ペードロのとった行為はすべて無効とするほか、皇太子に至急帰国するよう命じた内容のものであった。もう一つは、ブラジル政界の実力者で独立運動主導者となったジヨゼー・ボニファアシーオからの手紙で、ポルトガルとの緊張した情勢を告げ、一刻も早く独立するように促した内容であった。まさに、ブラジルの運命が皇太子の一存にゆだねられたのである。

ドン・ペードロは二通の手紙を読み終えたあと、歴史的な独立宣言を行なった。それは、有名な「独立か、それとも死か!」である。ときは一八二二年九月七日。英雄となったドン・ペードロは、後日、リオ・デ・ジャネイロで盛大な戴冠式を行ない、ブラジル皇帝を宣言してドン・ペードロ一世となった。

一八二三年五月、ブラジル帝国新憲法制定の議會が開かれた。草案はフランス憲法をまねて起草されたが、帝国であったから、フランス憲法のデモクラシー思想の内容は見られなかつた。議會では帝国憲法制定に合意がみられず難航した。これは、大別して、ポルトガル直屬の皇帝支持派とブラジル皇帝支持派と共和国樹立支持派の

①	一八二四年憲法	帝制憲法。その構造は三権分立式。調整権と有産階級による選挙を制度化。
②	一八九一年憲法	共和制憲法。米國憲法がモデル。大統領制、連邦制、男性の普通選挙。
③	一九三四年憲法	「30年革命」後の憲法。下院で職業別代表。女性に選挙権を拡大化。
④	一九三七年憲法	「新国家体制」下の憲法。全体主義的。選挙は事実上、なかった。
⑤	一九四六年憲法	自由主義体制の憲法。三権分立。直接選挙制。
⑥	一九六七年憲法	軍政下の憲法。超憲法的な軍政令。大統領の権限を強化。間接選挙を導入。
⑦	一九六九年憲法	67年憲法を大幅に改正。軍政令効力の明文化。間接選挙の拡大化。
⑧	一九八八年憲法	69年の軍政憲法を民政化。大統領選出は直接選挙で。93年9月には国民投票で共和主義か立憲君主主義かを定める。

ば、一八二四年、結集した北東部全州が「赤道地方連合」と命名して自由国を建設することを宣言して革命を起こした。その翌年の一八二五年には、ブラジル領土最南部の一部が革命を起こし、ウルグアイ共和国の独立宣言をした。

またドン・ペードロは、「余は何事も人民のためにする、が、いかなることも人民によるものではない」という独裁者ぶりと高慢心を発揮したため、民衆はもちろんのこと近衛兵までも反旗をひるがえして、今までの皇帝への不満やいらだちを爆発させ、暴動を起こした。彼はこれによって大いに反省。そして当時（一八三一年）、まだ五歳だった皇太子に王位をゆずり、摂政政治を設けたのちポルトガルへ退去した。こうして、皇帝の権威・政治力はいつそう弱体化していった。ドン・ペードロ不在は国民がいつそう暴動・紛争・革命などを引き起こす原因となった。

多くの歴史家や歴史資料によれば、ドン・ペードロ一世の性格は知識欲旺盛で、とくに音楽や芸術に興味をもつだけでなく、語学や機械学にも精通していた。また彼は、精力家で頑固な性格でもあった。彼は「快楽を好んだし、野心家で人気取りで、政治的経験に乏しく、正当な教育を受けていなかったために皇帝としての役割・手腕を十分に発揮できなかった人物」としても知られている。また彼は、「私生活においては放縦であったため、当時の国民から皇帝としての信頼を著しく失ったことは、ポンピドゥール夫人、ドミチーラ・デ・カストロという美しい娘との間のロマンス（彼女に皇帝の庭園内に邸宅を与え、彼女との間に生まれた子供たちを自分の子と認知したり、ドミチーラの親族に爵位を与えたりした）、またこのような事柄が重なって本妻は重病で早死にし、国民の同情・怒りをかっ<sup>3</sup>た」ことなどの問題でもよく知られているところである。

では、ドン・ペードロ一世の国家社会の中心的存在としての役割はどうであったのか。公的生活においてはどうかだったのか。それらの要点について述べることにしよう。

第一に、ドン・ペードロ一世はブラジル独立の先駆者であり、かつ新王国の創立者であった。

第二に、彼は、自由の精神を基調とするブラジル憲法を制定した。そして彼が（一八二四年三月二五日）承認したブラジル第一号の憲法は、その承認までは若干の紆余曲折をみたが、その後、共和国になるまでの約六五年間は、ブラジルにとって重要な基本法となった。この憲法は、以前許されなかった言論の自由を認めた。信仰の

対立であった。この問題を打破するため、皇帝はついに軍隊を導入して、同年の十一月議會を解散したのである。そして、新委員会を設け、一八二四年三月に絶対君主制にふさわしい欽定憲法を作らせ、皇帝は「神聖にして犯すべからず」（第一条）と定めた。（その憲法とその後<sup>1</sup>に改憲された要点については、表1を参照。）

当時の情勢は、ヨーロッパはもちろん、アメリカ大陸全土で君主制からの独立運動が次々にいたるところで起こっていた。ブラジル皇帝はそういう状況の中での君主制であったから、安定したものではなかった。たとえ

自由も緩和した（とはいっても、カトリック教以外の宗教は各家庭内だけの行事を許されたに過ぎなかったが）。法律の下における社会的平等をも保証した。また皇帝だけの意志決定ですべてを立法化するのではなく、上院議員（貴族、終身制）と下院議員（一般人、四年任期）で構成した議会制度によって議決されるようになった。第三に、経済的な側面で大きな貢献をした。たとえば、ブラジルは一八二六年から一八二九年の間に、デンマーク、プロシア、オーストリア、フランス、英国、オランダ、イタリア、アメリカなどと通商条約を結んで国家の経済的安全を確立しようと努力した。またこの頃から政府は移民を受け入れはじめ、当時活気づいてきていた農業（おもにコーヒー栽培）にも力をいれた。

最後に、文化的な面では、一八二七年に、ラテン・アメリカ諸国第一号の法科大学がサン・パウロと北東地方のペルナンブッコに設立された。それだけでなく、ドン・ジョン六世が、一八〇八年にナポレオンに追われてブラジルに避難してから精神的に始めた庶民教育（おもに小学校、中学校）と公的施設の建設・維持・発展の思想を受け継いで、それに力を注いだ。

### (三) ドン・ペードロ二世の時代

ドン・ジョン六世がポルトガルで崩御したのは一八二六年三月一〇日のことであった。その長男のドン・ペードロ一世はブラジル国王であったが、同時にポルトガルの皇帝の相続権を有する立場にもあった。このため、一八三一年四月、ドン・ペードロ一世はポルトガル皇帝のドン・ペードロ四世として帝位継承のためにブラジルを離れることになった。このとき、摂政を設けた。王位を継承するためにブラジルに残った彼の長男ペードロ二世は、当時、わずか五歳という年令であった。

ドン・ペードロ一世がポルトガルへ赴いてからすでに一〇年経った一八四〇年、ペードロ二世はまだ十五歳であった。当時、ドン・ペードロ二世はブラジル国内が混乱と紛争の連続という情勢を憂え、無政府状態を改善するために「直ちにでも即位したい」という旨を、当時の摂政アンドラーダ兄弟に告げた。緊急議会が開かれ、十八歳を成人とする法を十五歳に下げる旨につき決議され、直ちに成人宣言が認められた。こうして、彼は一八四〇年七月二三日に、公式にドン・ペードロ二世として即位したのであった。

ブラジルはその即位後もまだ一〇年以上も無政府状態で、混乱や紛争が続いた。その内容を一言でいえば、ポルトガル皇帝による直轄支配を支持するグループと、ブラジル王室支配を支持するグループと、共和国樹立を企てるグループたちの政治的思想の違いによる摩擦であった。それはまさに社会の混乱を招いた年月であった。

まず、たとえば、一八三五年のバイーアの黒人たちによる暴動である。彼らはアフリカから奴隷として強制的に連れて来られた人たちで、白人たちに真っ向から反対しようと密かに企てていた。北東地方に住むこの黒人たち——アラビア語を読み、書き、イスラム教の経典であるコーランを朗読していた——による暴動は、当時の市民を震え上がらせた事件であった。また同年には、南方（リオ・グランデ・ド・スール）やサンパウロでも連邦主義者や共和主義者が独立革命を起こした。国はいくつにも分裂して、多くの独立国家が生じようとしていた。

一八三八年には、アマゾン河口近くのマラニオンで黒人が彼らだけによる独立共同体を設けようとして暴動を起こした。数年後の一八四二年にはサンパウロ（ソロカーバ）とミナス・ジェライス（バルバセーナ）で共和革命が起こった。その後も長年、混乱・内紛が続いた。そして、一八六五年から七〇年までの五年間、ブラジル・パラグアイ間で南米最大の戦争まで起こり、犠牲者は五万人にものぼった。さらにはその期間に史上未曾有の干ばつに襲われ、死者の続出と貧困に苦しみ、その後遺症が尾を引いた。

しかしながら、ドン・ペードロ二世の時代、「摂政時代の混沌たる政情に拘わらず、ブラジル人が政治的にスペイン系諸共和国に比較して不幸だったと言えないことは、ドン・ペードロ一世の治世におけると同様である。のみならずこの時代は、将来国家を担う人材に政治的訓練を与えた点でも意義深いものがあつた。この間においてもブラジルは経済的・文化的に進歩を継続し、不穏状態に拘わらず人口は急速に増加し、外国貿易額は激増した」といわれていることは注目に値する。

また、ドン・ペードロ二世は、「修養、傾向、性格等の諸点において父と対照的であり、あらゆる意味で優れた帝王としての資格を具備していた。幼時における彼の教育は極めて厳格で、規律正しいことは修道院のそれのようであつた。ペードロの日課は分秒も違ひはないようにかく守られ、健康、娯楽、学友等一つとして彼の私事ではなく、国家的関心事であつた。彼の教養は広汎かつ健全で、芸術や各種の学問に特別の興味をもち、文学者や科学者たちとの交友を好み、非常な読書家で帝位よりもむしろ書物を愛したと思われるくらいであつた。彼の外貌は：人を威服せしむる堂々たるものであつた。ペードロ一世とは異なつて、彼は飾り気がなく、品位を備え、趣味が洗練されており、生活や服装は民衆的でありながら、しかも安価な人気取りの様子は全然なかつた。彼は親切かつ正直で、<sup>ふち</sup>叡知と正義とをもつて国を治めようと不断に配慮していた。大臣を任命するに当たつては、党派に拘泥しないで、最も卓越した人物を簡拔した。強いて欠点を探せば、彼は想像力に欠けており、またあまりに人々の意見を徴し過ぎたことであつた。要するに、彼は五〇年の長い間、ブラジルの統治に心血を注いだというよりも、むしろブラジルのために生きたのであつた。彼は人民を愛し人民も彼を深く敬愛した。ブラジル人は彼の存命中には政変を起こすには忍びないと考えた。したがつて共和制に対する要求が一般的に熾烈さを加えて来た時代において、見事に君主制を維持し、かつ全世界の尊敬と称賛を博しえたのは、一つに彼の偉大な精神と

一身に備わつた徳望によるものであつた。

彼がこれだけの名声をかちえたのは猷身的な皇后の内助に負うところがある。：皇后テレサ・クリスチーナはペードロと同じくブラジル国民に愛せられた。人民は、皇后をいたわり愛するペードロを愛した。ペードロの長い治世の間にかりそめにも私生活上の批判を受けることは一つもなかつた。

国内平和の確立と共に、ブラジルの経済的文化的発展は目ざましいものがあつた。：殊に皇帝は教育事業に熱心で、ブラジルの進歩は国家が率先してその振興を計ることにあつたと考えた。公の事業としては小学校と中学校は憲法の〈追加法〉によつて衆議会の所管事項になつていたが、皇帝はそれを様々な方法で育成した。：パラグアイ戦争終結後：戦争の勝利を記念するために、ペードロ二世の銅像を建てる運動が始まつたが、皇帝はその計画を中止させ、募集した寄付金を学校の新設と既存学校の改善の費用に充てることを命じたのであつた。

ブラジルの歴史家オリヴェイラ・リーマ氏は、当時の政府の機構が年々格別の破綻も来さず円滑に運用されたのは、「道徳の専制政治である」と述べている。

一八八九年十一月十五日、共和国樹立の革命が起こつた。多数の共和国主義者は、ペードロ二世が国民の間に敬愛されていることを配慮し、革命の実行を老皇帝の死まで待った方が良いという考えをもつていた。だが、極端派はそれを待てなかつた。ドン・ペードロはペトロポリスで捕らえられ、リオ・デ・ジャネイロに護送された。革命は一人の生命の損失、流血の惨事もなく遂行された。ヴェネズエラ大統領フストは、当時、ブラジルの革命を耳にして、「南米における唯一の共和的な国であるブラジル帝国が消滅した」と惜しんだといわれている。

新政府は、退位したドン・ペードロの体面を尊重し、退去させる際に五千コントス（当時、多額）を贈与した。だが、彼はそれを断つた。革命の翌々日、彼は亡命者としてその家族と共にポルトガルへ向かつた。ドン・ペー



ドロは、その二年後、愛するブラジルへ再帰国する日を待ちながら、パリで死去した。彼は退位の時も亡命中も、ブラジル人に対して怨みを述べたり、不満をもらしたりすることはなかったといわれている。

一九二二年九月七日、ブラジル独立百年祭の祝賀行事の時、すでに革命後の政治的安定も見られ、また、ドン・ペードロがブラジル生まれであったことを考慮して、ペードロ二世と皇后テレーザ・クリスチーナの遺骸はポルトガルからリオ・デ・ジャネイロに丁重に移され、司教座（カテドラル）のサン・セバスチアン教会に安置された。

その後、二人の遺骸は、一九三九年の共和制五〇年記念祭の折に、ペードロ二世が創立した町ペトロポリスへ移され、特別に建立されたチャペルに丁重に移葬された。

#### 四、共和国時代とその指導者たち

##### (一) 共和主義者の時代

一八八九年十一月十五日、革命が起こり、共和国が誕生した。

この革命はフランスのオーギュスト・コントの共和思想に基づいたものである。共和思想の原理・教典（A・コント『実証政治学大系』の冒頭にある）の一部、「愛を原理とし、秩序を基礎とし、進歩を目的とする」という言葉から、「秩序」と「進歩」をブラジルの国旗に記した。

初代の大統領には、共和革命をリードしたデオドロ・ダ・フォンセッカ元帥が選出された。

新体制の憲法は、希に見る博識の法学者ルイ・バルボザの指導のもとに、アメリカ憲法を模倣してつくられた。新憲法には全市民の「自由、平等、幸福の実現」がうたわれ、「信仰、性別、国籍、人種、肌色」に対する差

別や偏見を禁じた。また、出生児問題については、血統制ではなく領土制を採用して、ブラジル領土で生まれた者にはブラジル国籍を認証した。ドン・ペードロ一世時代の欽定憲法に見られた「黒人はブラジル人ではあっても市民ではない」（第九二条）という文面とは対照的な人権尊重・人間尊重が見られた。ちなみに、当時、黒人はカトリック教徒として洗礼を受けることもできず、また名字もなかった。新憲法では国家と教会とが明確に分離され、公の施設における教育は国家の法令によって保証され、カトリック教の指導に従う必要がなくなった。

新体制は、海外からの移住をいっそう自由化して大いにブラジルの開拓に力を注いだ。当時、ヨーロッパから新天地（全米大陸）に移住した数はおよそ七五〇〇万人にも達したといわれる。その一部の約一〇〇万がブラジルに移住してきた。少し後の一九〇八年から、日本人のブラジル移住が始まった。

大統領のデオドロ元帥は、極めて利己的かつ拙劣な性格の持ち主であったため、独裁制を強行しようとして議会では常に衝突した。一般国民から反感はもたれても尊敬されることはなく、支持もなかった。革命時に加わった軍人までも反乱を起こした。デオドロは、このような状態を重視して、革命後二年目の一八九一年十一月二三日に辞任した。

デオドロの辞任後、副大統領のフロリアーノ・ペイショートが大統領に就任した。ペイショートは、皇帝の軍人としてはペードロ二世を裏切り、共和制の副大統領としてはデオドロ前大統領に協力しない不忠実な人物であった。

大統領としてのペイショートは、明確な政治理念を持たず、国民の声を聞くこともなかった。政治態度は、無秩序な命令、濫費、汚職がその特徴となった。これを非難する者は、弾圧された。

当然、このような状態が長続きするはずがなかった。やはり軍内から反乱が起こった。ペイショートは米国か

らの武力的・経済的援助を受けて対抗した。鎮圧に成功したペイショートは、これを契機に益々残酷化していった。また密偵が横行し、留置所は被疑者でいっぱいになった。デオードロ大統領就任から数えて五年満了期の一八九四年十一月には、彼は法に従って大統領のポストを去った。

ブラジルは、すでに書いたとおり、一八〇八年のポルトガルからの王室移転を契機に開港・開国して移住の自由を認めた。その後、一八二二年の帝国樹立、一八八九年の共和国樹立と数々の政治的変遷はあったが、一貫して変わらずに実施された政策は、移住の自由であり、そしてこれが要因となって多人種多民族による国家形成を確立させた。次に述べるヴァルガス独裁政権時代の初期においても、移住の自由が認められていた。

## (二) ヴアルガス独裁政権時代

一九三〇年十一月二日、ジェトゥーリオ・ドネーレス・ヴァルガス（母方の家名からイタリア系の子孫であると推測される）は、軍隊を率いて革命を起こし、大統領の座に就任した。彼は新たな体制を「新国家」と名付けた。この体制の内容は、「独裁政治が骨子となっており、政府機関の運用についてはナチス総統府の組織に似ていた。議会は廃止されたが、かわりに政策分野別に議会制度を設け、これを大統領の諮問機関とした」のがその特色である。彼はこの非常事態に新機軸の方法を用いた。三権分立の原理では、大統領はただ規定法の行政命令を実行するデクレト(Decreto)を用いるのが基本原則である。だが、ヴァルガスはこの行政命令のほか効力のある法律レイ(Lai)を併合してデクレト・レイ(Decreto-Lai)という新語を生み出し、「行政権と立法権を兼ねたスーパープレジデントになったのである。

ヴァルガスは、一九三〇年に、商工労働省を設け、労働者の休暇を規定（ブラジルのメーデーは当大統領の産物）、労働者組合・雇用主組合の組織を規定、商工業勤務時間を規定、また労働調停裁判所を設置するなど、国家と社会の経済・労働問題の解決を目指して広く貢献し始めた。このような政治理念を土台にしたヴァルガスは、一九三四年、新憲法を公布した。この憲法はドイツのワイマール憲法の影響を多く受けている。

また、多種多民族で構成されたブラジルのナショナリズムにつとめ、国家統一と国民の精神高揚をはかっている。また、「ブラジリターテ」(ブラジル精神)という言葉と、国旗四色(緑、黄、青、白)中の二色、黄と緑を用いてつくった「アウリヴェルデ」(国旗の別名)とをその国民統合の象徴として広く活用した。それだけでなく、共産党員の赤狩りも行なった。赤狩りは共産主義を嫌ってブラジルへ移住した多くの東欧人とくにポーランド人やロシア人、イタリア人やドイツ人からも支持があった。戒厳令の下に行なった捜査件数は約五千件を超えるという。一九三七年に「新国家」と命名して独裁政権を樹立したヴァルガスは、当時、世界に見られた全体主義・軍国主義・独裁主義、つまりイタリアのファッショ、ドイツのナチス、日本の軍国主義、スペインのフランコやポルトガルのサラザール独裁者たちの仲間入りをした。ブラジルの独裁者は、当時の世界の流れにあって例外ではなかった。

一九三九年に始まった欧州での第二次世界大戦は、とくにブラジル在任のドイツ人に対して警戒が厳重となった。のちの一九四二年一月、リオで汎米外相会議が開催された。ヴァルガスは、その会議で「採択された決議に基づいて枢軸国に対する国交断絶を行なうことを余儀なくされた。次いでアメリカの対欧州航路の安全を確保するため、ブラジル北東地方の各地に空軍基地を設置することに賛成」した。

一九四二年六月から八月までの間、枢軸国のドイツ潜水艦がブラジル海岸で出没してブラジル商船を相次いで沈没させるという事態が起こった。この出来事によって、枢軸国系の住民に対する各種の制限が行なわれた。旅

行の制限、不動産の売買禁止、海岸地帯からの立ち退き命令などである。サントス付近には日本人の漁業者も多く、打撃を受けた。砂糖やその他の食糧が配給制になり、国民の不安が増す反面、もう一方ではブラジル人の愛国心が高まっていった。ポルトガル語以外は使用禁止。外国語の新聞・雑誌発行やラジオ報道禁止のほか、枢軸国系の人は罵声を浴びせられるようなこともあり、敵対感や緊迫感、摩擦などが増していった。

一九四二年八月、ブラジルはヴァルガス大統領令により、ドイツ、イタリアに対して宣戦を布告した。その二年後の一九四四年七月、ブラジルからイタリア戦線へ二五〇〇〇からなる兵士を派遣して参戦し、勝利の連続となった。南米から兵士を戦場へ送ったのはブラジル国だけであった。ちなみに、ブラジルが第一次世界大戦で「被った損害は沈没された商船三二隻で約二〇万トン、巡洋艦一隻が沈没され乗組員三三〇名、さらに欧州派遣軍の戦死者四四三名<sup>8)</sup>」であった。

ブラジルは一九四五年七月、日本に対して宣戦を布告した。第二次世界対戦勃発以来、枢軸国系人には制限がいつそう多くなっていったのだが、なかでもブラジル在住の「日本人にとっての痛手は情報を断たれたことである：ナシヨナリゼーション政策によって戦前から日本語の新聞雑誌の刊行が禁ぜられ、さらに戦時となって短波放送の受信が禁止された。ポルトガル語の読み書きの不自由な多くの日本人はまったく：母国の事情や国際ニュースを人聞き、マタ聞きに頼っていたから、デマに惑わされやすく、終戦を迎えたときも、にわかには日本の敗戦が信ぜられなかった。

戦後、負け組・勝ち組の対立が起こって険悪な状態となった。端的に言えば、これもヴァルガスがとったナシヨナリゼーションの政策に、その遠因があると「言ってよい<sup>9)</sup>」であろう。

一九四五年四月、ヴァルガスは特赦令に署名し、共産党員らは自由の身になった。また多くの亡命者も帰国し

た。昔から共産主義にアレルギ的であった軍首脳部から、ヴァルガスは元共産党員と接する機会が多くなったとして、その策動に大きな疑惑を抱かれ、軍との信頼関係が急激に悪化した。同年十月、ヴァルガスは軍首脳部から辞職を迫られて下野を決心した。十五年間続いたヴァルガス独裁政権の終わりではあったが、彼の政治活動の終わりではなかった。

一九五〇年十月、ヴァルガスは再び大統領選に出馬して当選した。その後、ブラジルの工業化に重要であった石油企業、ペトロbras石油国営公社の創立、エレクトロbras電力公社の設立、情報システムの拡大化、自動車産業の拡大化、日本の石川島播磨造船所との合弁会社設立など、ブラジルの工業化のために努力した。

このような中、不幸な事件が起こった。一九五四年八月、ヴァルガス側近の親衛隊員の陰謀によるヴァルガス政敵（カルロス・ラセルダ氏）襲撃事件である。政敵は軽傷を負っただけだったが、その横にいた軍人（パス少佐）が誤って殺害された。この予想外の事件究明に陸空海三軍の首脳部が動き始めた。これを重視したヴァルガスは、その責任を負って、八月二四日早朝、ピストルで自決した。

自殺の場合、キリスト教は洗礼を受けた者であっても、神から授かった尊い命を粗雑にした、神の意志に反した行爲であるとして、自決者のミサを行なわない慣わしである。だが、国家社会の中心的人物としての貢献度は多大なものがあったから、「ヴァルガスの葬送ミサはリオの大伽藍で大司教がとり行ない、墓地まで十余キロの沿道は悲しみの群衆によってびっしり埋めつくされた<sup>10)</sup>」のであった。

ヴァルガスの性格は、辛抱がよく粘着力に富んだ男との評があった。ヴァルガスの娘アルジーラによると、彼の「忍耐力は長年にわたって培われた自己抑制の産物であって、生来は短気で癩癪<sup>かんかく</sup>な性であった：とくに彼にとって我慢のならないことが三つあった。それは一度聞いた話を二度聞かされること、カンが鋭くて険のある人を

相手にすること、それと時間にだらしなないこと」であった。<sup>(11)</sup>

ブラジル歴史家ジョゼ・マリア・ペーロによれば、ヴァルガスほど論議された人物は他にないという。「彼は、無限の賛辞や崇拜から最低の評価や否定にいたるまで、ありとあらゆる批評の対象となった。またヴァルガスほど強大な権力を一身に集中した政治家は他にない。始めは革命政府の首班として、ついで国会から選ばれた大統領として、また自らの手で公布したナチスばりの憲法の独裁者として、そして最後には国民の総意によって選出された大統領として……」<sup>(12)</sup>

ヴァルガスの思想的な面をとりあげた斎藤弘志氏（元サンパウロ大学教授）によれば、多くの論者がヴァルガスはファッショの信奉者であり、ナチスのシンパであったというが、「おそらくヴァルガスにとっては、ファッショもナチスもイデオロギーの問題としてではなく、ブラジルが置かれた歴史的状况からこれを政策的に反映させたものではあるまいか」と述べている。

ヴァルガスの娘アルジーラの『回想記』に、「父ヴァルガスは、ブラジル人の良心として国家統一の運動を展開することが絶対に必要であることを痛感していた。ブラジル独立の初期から国の分割や地方の分立の試みは何回も起こってきたが、こんな考え方を一掃する必要を痛感していた。『大きな州も小さな州もない。あるのは大きいブラジルだけである』。国旗の日（十一月十九日）に……父はこう演説した。」と記されている。<sup>(13)</sup>

### (三) ブラジリアの父、クビチェック大統領の時代

一九五六年一月、ジュセリーノ・クビチェックは大統領に就任した。彼（ブルガリア系移民の二世）は、ブラジルの開発を目的として「五〇年を五年で」というスローガンで大統領選挙に挑んで勝利を得た。そのスローガ

ンの内容は、「国家的統合」と「国家の開発優先の精神」の二原則を実現するため、当時の首都リオから（現在の）ブラジリアへの遷都を実現しようという大胆なプロジェクトを掲げたのであった。そのアクション・プログラムとして、人体の動脈・神経のように、道路、動力、輸送、輸出港などの基礎工事の実現をはかり、欧米諸国に比べて五〇年遅れたブラジルを五年で取り戻そうというのがその趣旨であった。

ブラジリアはリオ・サンパウロから約二二〇〇キロも離れた地点にあるため、首都建設のためのすべての建築材料が自動車で運ばれた。当時のブラジリアは見渡す限りの大高原で、何もないとどころであったから、空送されるということもしばしばあった。だから、彼は「空飛ぶ大統領」のあだ名で知られたほどであった。

クビチェックは、ブラジリア建設の時期やその遷都から生じる財政・政治などの諸問題について国民が不安を抱いていることもよそに、スローガンどおり建設した。首都建設だけでなく、アクション・プログラムで公約したとおり、ブラジリアIIベレン間（約二〇〇キロ）、サンパウロIIポルトアレグレ間（約二二〇キロ）、リオIIバイア間（約六〇〇キロ）などの国内長距離横断道路を建設するほか、自動車工業、鉄鋼、重工業、農業の機械化、外国企業の導入などを積極的に行った。

クビチェックの行動と「彼のどっかい夢は、やはりブラジル人の性格にも共通する。南米大陸のヘソにあたる広漠たる原野のまっただ中に近代的な都市を建設するという構想は、ブラジル人なら目を輝かせて乗りそうな話である。ブラジル人のロマンチズムといえるかもしれない。今日、国際線の大型ジェット機で北からアマゾンの大森林を眼下に南下し、あるいは南からサバンナやセラード（かんぞう 灌木林）を北上し、ブラジリア国際空港におり立った者は、はてしない高原のなかに忽然とあらわれる近代都市の姿に目をみはらないものはあるまい。」<sup>(14)</sup>

物価が五倍になっていた。次期の政権には一層拍車がかかり、インフレはますます増加した。またこのインフレが一九六四年三月の革命を起こす火種となったのである。

#### (四) 六四年革命——將軍たちの時代

一九六〇年十月の大統領選挙でジャン・クワドロスが選出された。ところが彼は就任してわずか七か月後、国会に辞表を提出して大統領の座を離れた。当時の副大統領ジョン・ゴラールが大統領になった。

クワドロス前大統領は、任期中に自由貿易の原則を掲げ、共産諸国である東欧との通商をひらき、左翼国のキューバにも接近した。チェ・ゲバラがブラジルを訪問した際、彼には名誉勲章まで贈った。クワドロスが辞表を提出した時、副大統領は中国を訪問中であつた。このような一連の出来事は、共産主義を毛嫌いする軍部や国民の多くを非常に困惑させた。

当時のブラジルは、クビチェック政権からの遺産の借款問題と悪性インフレに悩まされていた。六三年度は八〇%のインフレ、翌年の六四年度は一四〇%に達するだろうと予想された。全国のいたるところでストライキ、銀行強盗などが続出し、政治・社会は不安、混乱、内紛の明け暮れであつた。

一九六四年三月の下旬、サンパウロでは大統領の言行に対する不満を示すため、「神と家庭と自由を守ろう」と大規模の街頭デモが行なわれた。当時のサンパウロ知事もこれを支持した。この運動は、明らかに反政府デモであつた。同年三月三十日、ゴラールは憲兵下士官クラブの四〇周年式典に出席。この席上で、彼は、「大衆の宗教心を利用し反政府運動を起こした仮面の民主主義だ」とデモを非難した。反政府派のマスコミは、翌三十一日の新聞で、いっせいに大統領演説を攻撃した。その夜、軍隊が三・三一革命を起こして政権を握った。ゴラールは

家族でウルグアイへ亡命した。

軍事政権の大統領第一号は、ジョゼー・H・A・カステロー・ブランコ元帥である。彼（名字からすればイタリア系の子孫のように思われる）は、第二次世界大戦でブラジルがイタリアに派遣軍を送って参戦したときの参謀長官であり、また、政治と軍の不可分関係を重視して軍最高学府（ESG）を設置した一人でもある。

カステロー・ブランコ政権（一九六四—一九六七）は、軍事政令によって反体制派政治家の海外追放や参選禁止などを定める一方、経済面では強行手段でインフレと失業率を押さえて国家の発展に努力した。彼は決断力に富んだ政治家と評価された人物であつた。

軍政二代目の大統領コスタ・エ・シルバ政権（一九六七—一九六九）は、さらに強硬な手段をとつた。当時、左翼のテロがさかんとり、軍力まで出動して社会の安全をはかるといふ悪化した事態にあつた。この大統領はカトリック教国の伝統になじみのない死刑を制定して社会の安定をはかった。が、今まで死刑を執行したことは一度もない。

#### ブラジル国家の指導者たち

軍政三代目の大統領エミリオ・G・メジシ政権（一九六九—一九七四）は、内閣の民官の調和をめざした。その中の一人として、若い安田フアビオ商工大臣（海外日系人では第一号）が誕生した。フランス系の子孫であるメジシ大統領はこのような若手の頭脳人材を生かしてインパクト・プロジェクト（革新的政策計画）を設け、国家・社会の統合・発展をはかった。その主なプロジェクトはトランスアマゾンカ国道とその沿道開拓建設計画などを含んだ国家統合計画（PIN）をはじめ、社会統合計画（PIS）、北東部土地改革計画（PROTERRA）、ブラジルのセラードといわれる（日本の五・五倍もある）不毛地帯の灌漑化・緑園化を目指した西部開発計画（PRODOESTE）、サンフランシスコ下流域開発計画（PROVALE）、農村労働者福祉計画（PR

ORRURAL) など、さまざまな大型プロジェクトが誕生し実践に移された。メジシ大統領は、前大統領が築いてきた地盤を継承し、さらに高度成長を実現させて、「ブラジルの奇跡」を起こした大統領として知られている。軍政四代目の大統領エルネスト・ガイゼル政権（一九七四―一九七九）も前政権に次いで二人目の日系人、植木シゲアキ鉱山エネルギー大臣を誕生させた。

この大統領はドイツ移民の二世で、男兄弟はみな軍人という、めずらしい家系の人物である。一九七三年の世界規模のオイルショックはブラジルにも危機をもたらした。燃料問題は国家の安全にもかかわる。ガイゼル政権は当時、この問題を打破するための大がかりな研究グループを設け、数年後、燃料再生産の可能なアルコール（化学名メタノール）車を開発し、成功をおさめた。今では、原料も車も世界の多くの国々に輸出しはじめている。六四年の革命当時の一四〇％のインフレは、歴代大統領の努力によって年々減少し、ガイゼル政権時代にはみごと一〇％台におさえられ、失業率も一ケタ台にまで低くなっていった。そのころのガイゼル大統領は、アメリカの発言を内政干渉であると反論したり、アメリカの軍事援助を断ったりした。そして、伝統的なアメリカ依存型から「乳離れ・羽ばたき現象」の脱却政策をとって、国際的にも注目された。また、ガイゼルは、日本人移住者たちによる国家社会への貢献度を高く評価し、現職中に日本の皇室を公式訪問して、ブラジル移民七〇年記念祭の行事参列のための招聘を行なった。これは、ブラジル史上、異例のことである。

軍政五代目（最後）の大統領ジョン・ファイゲイレード政権（一九七九―一九八五）は、五つ星の將軍ではあったが、公では一度も軍服で現れることはなかった。彼は別名「背広の軍人大統領」として知られた。この大統領は長びく軍事政権のイメージも考慮して、国際世論に配慮しよう配慮した（だが共産主義者の追及はブラジル軍人らしく怠らなかつた）。なかでも経済・社会問題については各分野の活性化を奨励するとともに、政治では次期

大統領候補決定に関与しないと事前表明し、民主化を促進した。

一九八五年一月、タンクレード・ネーヴェスは民主選挙で文民政権の新大統領として選出された。だが、四月二日、大統領就任の前日、病気のため死去。その翌日、副大統領のジョゼ・サルネイが大統領に就任した。

サルネイ政権（一九八五―）は、長期間の軍事政権が基礎工事（世界一規模の水力発電所、原子力発電所、バイオ研究、最先端の科学技術研究、軍事・気象用の人工衛星、等々）に投資してきたそのつけを清算する時期にあった。彼は一九八七年二月、国連開会式の慣例演説で、「国内の不況を招いてまで対外債務を決済する意志はない」と表明。この「ひらきなおり」は国際的金融機関の信頼をいっそう減少させた。このような状況の中、為替切り下げ政策と新通貨（クルゼーロからクルザードへ）切り替えを実施して悪化するインフレを抑えようとした。だが、結果は不成功に終わった。ブラジルは「累積債務を払わないのではなく、一時的に払えない」ことについてIMFや国際金融機関などに理解を求めて努力。また、サルネイ大統領は、この困難を打開するため国民に広く理解と協力を求めて数多くのテレビ演説を行なってきた。

ブラジルでは、六月十八日は「移民の日」であり、全国的な祭日である。その「移民の日」の一九八八年六月一八日に、サンパウロのサッカー競技場ではブラジル史上もっとも大がかりな祭典が催されていた。それは、ちょうど八〇年前の一九〇八年六月一八日に、日本人がブラジルへ移住した歴史的出来事を祝う祝賀が行なわれていたのである。サルネイ大統領はその祭典に参列し、日本からの移住者とその子孫の功労、日系人のコミュニケーションの価値などを高評すると同時に、不況改善への協力・理解を求めるメッセージをおくった。

## 五、モラロジという「伝統」の原理からの一考察

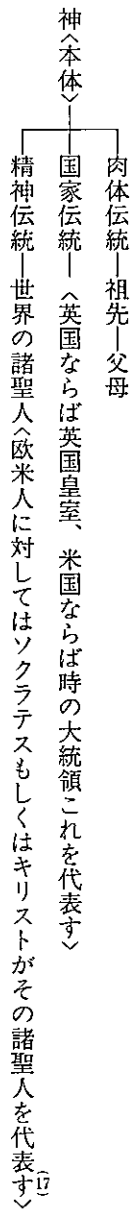
(一) モラロジという「伝統」、「国家伝統」とは何か

モラロジ（道徳科学）の創立者、広池千九郎（一八六六一—一九三八）が著した『道徳科学の論文』にみられる「伝統」、とりわけ「国家伝統」について述べたいと思うが、そもそも、モラロジという「伝統」とはいったい何なのか。

「伝統」と申しますのは神（本体）及び聖人より直接にその精神を受け継ぎておるところの一つの系列の総称<sup>16</sup>である。そして伝統表で次のように大別されている。

### 伝統の三大別

(第三表) 欧州諸国及び北米合衆国における伝統表



国家伝統は全世界に三種類ある。第一は、国家の主権が君主の家に存在し世襲される。日本がその例である。

第二は、その国家の主権がその国民全体に存在するものとされ、形式においては、皇室、王室に存在する。たとえば英国等である。第三は、国家の主権が国民全体に存在し、大統領が交互にたつてその代表者となる。たとえ

ば、ブラジル等である。

広池は、国家伝統の重要性を次のように述べている。「おおよそ人間の生存、発達及び幸福の第一根本原理は人間の生殖本能・飲食本能及び群居本能に基づきて、家族を構成せし点にある：この家族団体は人間社会の基礎をなしてあるので、将来、人類にたといかなる場合あるも、この団体の破滅することはない：この家族団の発展して究極に達せるものがいわゆる国家である：故に人類の社会の中にてこの家族団体と国家団体とは真に人類の生存・発達及び幸福希求の自然の結果として、人類の精神的、形態的全部の結合より形成されたものである<sup>18</sup>で、他の団体のごとくにある一条件もしくは数条件の下に結合されるものではない<sup>18</sup>。そして、「聖人正統の教えにありては、すべて在上の人の努めとしては、神様に奉仕して神様の精神を守り、この精神を下の人に移植してこれを感化・教養し、以てその国民を善良にしてこれを統治する<sup>19</sup>」ことにあつた。

真の国家伝統たらしめる特質は、要するに、「全く肉親の親と同じく、真の慈悲心をもって人民を愛し、終始その国民とともにその過程を同じくして、今日まで存在し且つ今後永久に存在し得る可能性を有するものに限る<sup>20</sup>」。これを別称「国の親、国民の親<sup>21</sup>」とも呼ぶ。以上、本章で述べる「伝統、国家伝統」に関する定義と基本的な要点を挙げた。

(二) ブラジルの国家的指導者は「国家伝統」であるか、否か

モラロジでは、「国家の主権がその国民全体に存し、且つその国民の総意によりて選出されたとところの大統領<sup>22</sup>」が国家伝統であると定義している。この文面から、ブラジルの国家伝統は大統領（共和国になる前の皇帝・国王をも含む）ということになる。つまり、大統領が「神・諸聖人の精神を直接に受け継い<sup>23</sup>」でいるということ

で、国家伝統としての重要な意味・価値をもつということである。

さて、すでに記したブラジル史をふり返ってみて、国家的指導者の中に、「神・諸聖人の精神を直接に受け継いだ人物を見出すことができるだろうか。換言すれば、指導者の中に、「神・聖人」または「人類の教師」（ヤスパーズ）のような人の「精神を直接に受け継いだ」者がいたのかどうか、ということである。

既述したように、約五〇〇年前にポルトガル人がブラジルを発見した後、ブラジルを植民地化して富を大いに搾取し、インディオ（原住民）の文化や慣習・生命を尊重することなく虐待し、そしてインディオや黒人を奴隷として強制的に支配してきた（虐待は今日にもおよんでいる）。ポルトガル人がブラジル領土を増やしたという利点はあろうが（図1〜図6参照）、これはただスペインとインディオから領土を獲得したに過ぎない。口悪く言えば、ポルトガル人は「新天地」の侵略者・略奪者であり、権力や威力でブラジル国家を形成してきたのである。

それだけでなく、ブラジルは植民地時代から独立国家成立後、現在にいたるまでの長い間、革命の連続であった。歴史的に常に革命を起こしてきた国であり、またコスタ・エ・シルバ元大統領までが革命を是認・称賛する表現をのこしている。広池は、「モラロジーにては革命は絶対には認せぬ」と言及している。また、「政治本来の原理：目的は国民の幸福実現にあるはず：しかしながら、その国家の統治及び行政に関係するところの政治家・官吏及び公吏は：国民を愛するということはその口のみにして、自己の所属するところの団体の利益を図ることを唯一の目的となして：国民の幸福は第二になっておる：それゆえに、各国ともに不平家もしくは革命家の妄動が却って一般民衆の同情を得、ついにその功を奏するに至る」のであると述べている。

J・A・ラワリース博士（一九〇二―一九八二）が、「問題は、一人の人間が国家伝統であるという考え方にある。この考え方は、日本以外の国には全く存在しない：他の国のすべての大統領は東京の市長のようなもの：わずかに残存している君主や国王は、世襲的な市長のような地位にある」と述べている。

広池は「真の国家伝統と申すは、我が日本の皇室のみにて、他の外国の主権者は、いわゆる国家伝統としてはその擬制(Mimicry)に過ぎぬのであるのですから、そういう国の国家伝統は、国家伝統としての真の価値がないのであります。されば斯かる国家伝統の説明は、その原理が科学的に成立致しかぬるのであります」と記している。

以上のような視点からブラジルの指導者を調べてみた限り、ブラジルの国家伝統として、「神・諸聖人の精神を直接に受け継いだ者、真の国家伝統と呼べる人物、つまり「肉親と同じくして、真の慈悲心をもって人民を愛し、終始その国民とともにその過程を同じくして、今日まで存在しかつ今後永久に存在し得る可能性を有するもの」といった国家伝統、国の親、国民の親は、誰一人として見当たらない。また、そのような人物が今後あらわれるかどうかは大きな疑問であり、誰一人として今後そのような人物が出現するとは断言できない。

したがって、ブラジルの今までの国家的指導者は国家伝統と呼ぶのにふさわしい人物とはいえない。また、ブラジルの大統領を国家伝統とみなすのは、決して適切とはいえない。以上、ブラジルの歴史を題材にして、「ブラジルの国家的指導者は国家伝統であるか否か」の問題を取りあげて考察してみた。

### (三) 誰(何)がブラジルの国家・社会を統一・維持・発展させてきたか

ブラジル発見以来、ブラジルの国家・社会を統一・維持・発展させてきたのは、ポルトガル皇帝が国教としたキリスト教の「隣人愛」の精神である。この愛の精神なしでは、多くの政治革命、特に学者の中でもめずらしくられる無血革命による政変はありえなかったであろう。この考えは、多くの学者の間にも共通している。

ブラジルの国家・社会を象徴する国旗・国家・国章には、フランスのオーギュスト・コントの思想が受け継が



れていることは既述したとおりである。コントの思想がブラジルの国家・社会に明確に定着したのは、ブラジル共和国が成立した一八八九年以後である。ブラジル共和国が成立してから、すでに百年目を迎えようとしている。この間に、憲法改定が七回も行なわれた(表1参照)。だが、それにもかかわらず、コントの思想を否定する動きは一度もなく、今日まで長く継承されてきた。

フランス思想の「自由・平等・友愛」というときの「自由」とは、自然の法則に従うときにのみ自由が存在するということである。「平等」とは文字どおり、「平らに等しい」という意味であり、各自の権利義務に比例する平等をいうのであって、一般に知られ考えられている「皆同じ」の意味とはまったく異なっている。「友愛」とはキリスト教に見られる隣人愛にのっとったコントの思想である。つまり、「愛を原理とし、秩序を基礎とし、進歩を目的とする」実証政治思想が、ブラジルの国家存続の基本をなしており、それが代々受け継がれてきている。

では、コントの思想の根底にあるものは何なのか。それはキリスト教の隣人愛であり、この愛がブラジルで大きな役割を果たしてきた。このコントの思想は当時の帝政から新体制にかわる原動力となり、また、その後、国家・社会を統一・維持・発展させてきた。共和国成立後は、歴史が語るとおり、世界各国に見られる多くの民族の移住を受け入れ、社会を構成・維持・発展させてきた。また今後とも変わらずその役割を果たし続けることと思われる。

なぜ、国民から敬愛されたドン・ペードロ二世の帝国が崩壊したのか。その真因は、いったい何なのか。それは、次のように要約できよう。

一八〇八年に、ブラジルは国際条約で奴隷の売買や輸送は人権侵害であり、売買・輸送を禁止すべきであるということに同意し、英国、米国、ロシア、ノルウェー、フランス、ポルトガル等と一緒に調印した。だが、それ

にも拘わらず、ドン・ペードロ一世と二世は、当時の多数の白人社会と経済的安定を重視して、調印後も長期間にわたって奴隷の売買・輸送を黙認したのである。ブラジルではこの国際条約は死文であった。一八八八年五月十三日、奴隷解放令が共和国主義者たちの強硬運動によって、やっと成立したのである。また、ドン・ペードロ二世の子供が、王位の継承者として、必ずしも好ましいとは思われなかった。それだけでなく、ドン・ペードロ一世には「愛人」の子供たちがいたが、これらが王位継承に関する権力争い問題につながることも憂慮された。共和国主義者たちはこれらを読んで行動に移した。以上のようなことをふまえた共和国主義者の行動には、キリスト教的愛の精神が見られたといっても過言ではない。

下程勇吉先生(京都大学名誉教授)によれば、広池のいう「国家伝統は、究極的には精神伝統によって基礎づけられている。国家伝統論の核心は広池博士の国家哲学である。広池博士が理想として描いた国家および国民は、根底を神の宇宙的原理に基礎づけられた道徳国家であり、それに参加する国民である」と述べている。<sup>30)</sup>

ブラジルにおいては、広池のいう大統領(前皇帝も含む)、つまり、ひとりの人間・人物がブラジルの「国家伝統」ではなく、社会に深く根ざしたキリスト教の愛の精神、換言すれば、モラロジイでいうところの「精神伝統」が、発見時から今日までの約五〇〇年間、国家・社会を統合・維持・発展させる重要な役割を果たしてきたのである。

## 六、むすびーモラロジイの国際化との関連においてー

広池の提唱したモラロジイが、人種のルツボともいわれる多人種多民族で構成されたブラジル社会において普及し根づくということは、すでにモラロジイの国際化であるといっても過言ではない。

広池の最大の悲願は、全人類の安心・平和・幸福の実現であった。広池はその悲願を実現するために、長期間にわたって国内外の膨大な文献・資料等を研究し、六〇余年前（一九二六年）に四千余ページにおよぶ大著『道徳科学の論文』を後世に遺してくれた。この業績こそは、広池の生涯における最大の遺物である。

広池が『道徳科学の論文』において提唱するユニーク（独特）であり重要と思われる「伝統」の原理を学ぶということとは、この世に尊い生命をうけたわれわれ人間を真の人間たらしめるものであると確信する。そしてまた、モラロジー全体を包括する「慈悲寛大自己反省」の精神を理解・体得し実践することが、人間としてひじょうに重要であると考ええる。

広池の意志を受けつこうとするわれわれにとって、世界の諸聖人に共通する思想を継承・祖述することが、広池の悲願に通じることであり、また、人心開発・伝統報恩につながると考える。そして、この学問をさらに進化発展させるのも、われわれの責務である。

本稿は、広池が著した『道徳科学の論文』の中の伝統、とくに国家伝統を中心に述べた。伝統については、今までに多くの人がいろいろな角度から研究してきた。

そのような中で、今回、ブラジルの歴史に基づき、伝統、国家伝統について、筆者なりの新しい光を当てて一考察を試みた。いうまでもなく、伝統、国家伝統についての筆者の研究は、「序の口」にあると考える。だからこそ、いくつかの難問を感じているのである。

モラロジーの国際化との関連において、今後の研究課題として、筆者は次のような内容を記しておきたい。

これまでに述べてきた難問の一つには、国家伝統の「国家」という言葉から生じるイメージや意味・内容の相違に問題が存在することを指摘しておきたい。その要点は次のとおりである。

① ブラジル（広くは西洋諸国）と日本とは、「国家」の形成過程が異なっている。ブラジルの場合は、権力・威力といった「力」によって国家を形成してきたのに比べ、日本では社会の中心にある人物が「徳」によって国家を形成してきた。また両国の国家成立過程においては、両国とも〈自発的〉に国家を形成してきたが、その過程の意味内容が根本的に異なっている。つまり、ブラジルでは自発的に（言葉どおり、自ずから発して）国家を建設してきたのに対し、日本では自発的（つまり、自然発生的）に国家が成立してきた。

② 国家伝統をナショナル・オーソリン（National Ortholin）と直訳することに問題がある。学者によれば、日本語の「国家」と西洋語の「nation」の解釈には相違がある。日本語の国家の語源は、「本来、西欧でははっきり区別される『国』と『家』の二語から合成されているところに特殊性があり、国を家の拡大と見る『家族国家観』などが、『国家』の語から出てきやすいと考えられる」とされている。この考えは、広池の国家観とも共通している。

日本語の国家を指す、national' nation' state という言葉は、第二次世界大戦で多く使われた。特にナチズム、ファシズム、ナショナリズムなどは、その語源が nation' state に由来しており、決して善いイメージでは使われていない。少なくともブラジルでは「国家」という言葉を使うことによって、広池のいう国家伝統の真髓が、ブラジル人には正当・充分には伝わらない可能性が強い。またこの言葉を直訳することによって、広池の「伝統」の精神そのものを伝えるのに妨げになる可能性が充分ある。それだけでなく、結局、モラロジーそのものが国際化しにくくなると考えられる。

③ 第二次世界大戦は、いわば、文化や言葉の解釈の相違（ひろくいえば宗教の解釈の相違も含む）が衝突を引き起こしたともいえよう。この不幸な世界大戦の経験と反省から、「人類は、今後絶対に戦争は繰り返さない、

との誓いを立て、平和への希望をもって、一九四五年、国連を発足させ<sup>(42)</sup>たのであった。そして独立国がこの国連や軍事同盟に加盟することによって、国家主権の絶対性が相対的になった。殊に、ILO、UNESCO、NATOなどが一国家の絶対性に疑問をもたせることになったことは広く知られているところである。

さらには、国家伝統の「国家」以上のものを考慮すべきであることもいくつか指摘しておきたい。その要点は次のとおりである。

④ 日本の国家伝統である天皇には、第二次世界大戦直後、マッカーサーまでが敬服したことでも有名であるが、この天皇は、多くの交友国の大使、領事、高官などに慕われ、皇室への表敬訪問を多く接待している。なかでも公使の夫人の別れの公式訪問などは涙で別れる場合もあるというほどである。換言すれば、天皇は日本・日本人だけの次元の国家伝統ではなく、すでに民族、国境、政治思想などを越えたレベルの「伝統」であるといえよう。日本では、天皇の位置と役割を明確にする必要がある。歴史的にみて、明治維新から第二次大戦の終わりまで天皇が全権をもっていた間、日本は国際紛争・戦争に巻き込まれた。それ以前は、だいたい平和であった。天皇は、戦前も今もモラロジイという精神伝統であると思われる。

だが、天皇が国家伝統であるかどうかについては論理的にどうなるのかという疑問がのこる。また、戦後の日本の政治・経済・社会・文化といった国家の運命を左右する首相は、モラロジイでいったい何と呼ばれば良いのか。「副国家伝統」と呼ぶのか、それとも「準伝統」なのか。そしてその内閣を何と呼べば良いのか。これらを明確にする必要がある。

ブラジルの場合も同様である。大統領以外、つまり、内閣、州知事、国際機関の貢献者等はいったい何なのか。これをはっきりさせる必要がある。

⑤ もうひとつのケースは、英国である。世界には多くの英国植民地が散在していたが、一九四〇年来以降、数々の植民地が独立国家となった。一九四七年に英連邦が設立され、今ではそれぞれの独立国家（英連邦は合計四十七か国で構成されている）には、それぞれの大統領、首相（モラロジイの国家伝統）が存在しながらも、その英国の王室を最高峰におき、精神的・道徳的・文化的なかかわりをもち続けている。いわゆる「女王」王は君臨すれども統治せず<sup>(43)</sup>の思想である。この王室の場合も、英国・英国人だけの国家伝統ではなく、まさに国家、民族、政治思想などを越えたレベルの「伝統」であるといえよう。

⑥ ソビエト連邦は十五の共和国の集合体である。これらの共和国にはそれぞれの国に長（モラロジイの国家伝統）が存在するはずだが、その上にソビエト連邦が存在し、書記長とその他の補佐がいる。このケースも、ある意味において、国境や民族を越えているといえよう。

⑦ 一九九二年には、European Community（ヨーロッパ合衆国）が誕生することは広く知られているとおりである。ヨーロッパ合衆国は十二か国で構成されており、英国も加盟国である。これを司る人物は何というのか。「国家伝統の国家伝統」か？ またこのような合衆国は、アフリカやラテン・アメリカにも生まれる可能性を十分はらんでいるといえる。これも、国家、民族、政治思想などを越えたレベルにある。

右の例は、すべての国家は相対的であり、世界が時間的にいつそう小さくなりつつある中で、明記した天皇などの公的役割は、道徳的にはすでに政治思想の次元や国家レベルを越えてしまっていることを示した。

モラロジイの国際化と関連して、「国家伝統」を考えるとき、現時点では複雑な側面が多く見られる。本稿がその一部をあらわしているといえよう。これらの諸問題を解決するため、今後の研究課題として取り組んでいきたい。したがって、最終的な「むすび」にはまだまだ時間を要するため、皆様のご理解をいただきたい。

〈注〉

- (1) アンドウ・ゼンパチ『ブラジル史』二二一―二三三頁  
 (2) 同右、一五一頁  
 (3) 田中耕太郎『ラテンアメリカ史概説』二六九―二七〇頁  
 (4) 同右、二六八頁  
 (5) 同右、二八八―二八九頁  
 (6) 中川文雄『ラテンアメリカ現代史』二二二頁  
 (7) 齊藤広志『ブラジルの政治』二二〇頁  
 (8) 中川文雄『ラテンアメリカ現代史』二四〇頁  
 (9) 齊藤広志『ブラジルの政治』二二一―二二二頁  
 (10) 同右、一三九頁  
 (11) 同右、七〇頁  
 (12) 同右、六四頁  
 (13) 同右、八五頁  
 (14) 同右、一〇二頁  
 (15) 同右、一四七頁  
 (16) 広池千九郎『道徳科学の論文』新版⑦二六〇―二六一頁  
 (17) 同右、新版⑦二六七―二六八頁  
 (18) 同右、新版⑦三〇二頁  
 (19) 同右、新版⑧一六六頁  
 (20) 同右、新版⑦二六五頁  
 (21) 同右、新版⑦二六五頁、新版⑧二五五頁

- (22) 同右、新版⑦三〇四頁  
 (23) 同右、新版⑦二六一頁  
 (24) 齊藤弘志『ブラジルの政治』一六〇頁  
 コスタ・エ・シルバ元大統領が遺した言葉は、次のようなものである。  
 「革命が行なわれる。多くのものは革命が起きると人間がかわる。革命を行なった者もかわる。そして他の人々が代わりに入ってくると考えるかもしれない。しかし革命には持ち主というものがない。それは国民のものだからである。しかし、革命には思想と規律というものがある。どんな犠牲を払ってでも、それは前進させなければならぬ。」  
 (25) 広池千九郎『道徳科学の論文』旧版⑥一六九五頁  
 (26) 同右、新版⑧五三―五四頁  
 (27) モラロジ―研究所研究部編『研究ノート』第一―一―号、二四八頁、二五八頁  
 (28) モラロジ―研究所編、『旧・紀要』②一八頁  
 (29) 広池千九郎『道徳科学の論文』新版⑦二六五頁  
 (30) モラロジ―研究所編『モラロジ―研究』⑥二一九頁  
 (31) 池田政章『国家』『現代新百科事典』③一八八頁  
 (32) モラロジ―研究所編『モラロジ―概説』三頁